

高社研地理部会主催 先生と生徒対象 地理夏季巡検 報告集



本庄市児玉町高柳地区の大恩寺にて。中央は住職のティック・タム・チーさん。奥の建物は新たに避難してきた在日ベトナム人が一定期間、感染対策のために暮らしていた時期もあった。

2022.7.29

埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会

■ 目次

- 高社研会長あいさつ・地理部会長あいさつ 3
- 巡検の概要 4～5
- 見学内容と参加者の声 6～21



本巡検に関する情報は、https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/#kaki_zyunken_2022 に掲載しています。



この巡検は、一般財団法人日本地図センターの研究活動支援を受けて実施したものです。ここに深く感謝申し上げます。

■ 高社研会長あいさつ

埼玉県高等学校社会科教育研究会長
(埼玉県立南稜高等学校長)
大竹 秀明

埼玉県高等学校社会科教育研究会の皆様には、本県の地歴・公民科教育に係る研究、実践に意欲的に取り組んでいただいていることに深く敬意を表します。

さて、地理部会の夏季巡検は、新型コロナウイルス感染症のためこの2年間中止されていましたが、今年度は感染防止対策に万全を期した上で2回目の実施をすることができました。計画・実施・事後に至るまで様々な御配慮をいただき、地理部会を中心とする先生方に改めて感謝申し上げます。

今更申し上げるまでもなく、現代の社会は変化が速い上に極めて多くの課題を抱えています。新学習指導要領において「地理総合」が必修科目として設定されたのは、持続可能な社会づくりに向けた地理教育充実の必要性が一つの大きな理由です。この科目は三つの柱から成り立っていますが、御案内のとおりこれらは関連付けて総合的に捉え、同時に人間の営みと関連付けるものと整理されています。

今回の巡検では、下久保ダム、譲原地すべり資料館、鬼石自然石センター、大恩寺と、次頁掲載のテーマを踏まえて、個人ではなかなかつくれない充実した日程を組んでいただきました。現地に赴いて新しい知識、多面的な見方や考え方を学び、深めていく大変貴重な機会にできたものと思います。今後学校では、知識を獲得するだけでなく自ら課題を設定し探究していく力が益々重視されます。御参加の先生方、そして生徒の皆さんにとって、より良い社会づくりに向けた課題を考え、考察していくスタートになったであろうことを確信しております。

こうした実践を今後も少しずつ積み上げ、皆様の研修や、授業実践に活用していただくことをお願いして、御挨拶とさせていただきます。

■ 地理部会長あいさつ

埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会長
(埼玉県立坂戸西高等学校教諭)
加藤 一郎

私も埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会（高社研地理部会）では例年、先生方対象の臨地調査研究（巡検）を実施しており、年間3回の研究会では、授業研究や研究発表に加え、地域やテーマを定めた巡検を実施してきました。この蓄積の上に、広くその経験や情報を生徒諸君や地理歴史、公民科の先生方へ還元することを目的に、生徒9名を含む27名の参加者を得て2019年以来3年ぶり2度目となる本巡検を実施することができました。

この巡検は、新必修科目「地理総合」の三つの柱（大項目）うち、「防災」と「国際理解」にフォーカスして見学先を設定しました。コロナ禍のなか、県内各地から先生方や生徒諸君が集まって見学できる地域として県境に位置する群馬県藤岡市と本庄市を目的地として定め、1日の日程で見学可能な4ヶ所を、貸し切りバスでの移動により訪問するというコースとしました。コロナの第7波の真っ只中にもかかわらず、我々を快く受け入れていただきました各施設のみなさまに深く感謝申し上げます。また、一般財団法人日本地図センター様には多大なる経済的支援を賜りました。さらに、狭く細い道路が多いルートにもかかわらず安全運転に努めていただきました多野観光株式会社のドライバー・保坂様、そして、感染対策に協力いただいた参加者のみなさまにもお礼申し上げます。おかげさまで事故なく安全に実施することができました。引き続き地理部会の活動にご支援いただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

■ 巡検の概要

1 高社研地理部会主催「地理夏季巡検」立案の経緯

高社研地理部会では、各学期1回、年に3回、研究会を実施しています。とくに2学期の臨地調査研究（巡検）が好評で、各地区の専門委員の先生方が持ち回りで企画・運営しています。近年では、部会の垣根をこえて歴史や社会部会の先生方の参加も増えています。近年のICTの発達によって教育の情報化が進み、知識やイメージとしての学習内容の伝達は充実しつつあります。一方、現実に触れる教科学習活動が行われる機会は減少しているのではないかと感じています。加えて教員の世代交代が進んで、地理部会の先生方の持つノウハウ継承も残された時間は限られています。2022年度実施の新教育課程で掲げられている「地図・GIS」、「国際理解」、「防災」という「地理総合」の三本柱や、深い学びを進めるために何らかの手立てを講じるのは今しかないと判断し、2019年度から地理部会の新たな企画として始めたものです。（前回2019年度の報告集より一部修正して掲載しました）

2 テーマ

「みんなの安心・安全のためには？・・防災と多文化共生の視点から」をテーマに設定し、視察地を選定しました。防災も多文化共生（国際理解）も、新科目「地理総合」の柱（A～Cの大項目）として掲げられています。二つの大項目を独立して扱うのではなく、互いに結び付けることができるのではないか、という意味も込めてこのようなテーマを設定しました。

3 当日の日程 * 時間は実際の時刻です。

9：15	本庄駅南口ロータリー集合
9：25	本庄駅南口ロータリー出発
10：30～12：05	下久保ダム
12：10～12：30	昼食・ダムを望みながら屋外で
12：45～13：45	譲原地すべり資料館
13：55～14：25	道の駅・上州おにし、鬼石自然石センター（株）
15：10～16：40	大恩寺
17：15	本庄駅南口ロータリー解散

4 参加者

申し込み総数は30人で、前日までのキャンセルが3人、最終的な参加者は27人でした。生徒の参加は9人で、在籍校は県立浦和6人、南稜2人、県立坂戸1人でした。

参加者の身分		部会（専門科目）		教員の年齢	
教員	18	社会（公民）	3	20歳代	2
生徒	9	地理	14	30歳代	4
		歴史	1	40歳代	4
				50歳代	5
				60歳代	3

5 交通手段と費用負担

集合後の移動は貸し切り観光バス（多野観光株式会社）を利用しました。バス代のうち5万円を（一財）日本地図センター研究活動支援で賄い、残額（3万8千円）は地理部会の負担にすることで参加者の負担はありませんでした。バスの手配は複数の旅行社に見積もりをとり、最も安価だった東武トップツアーズに依頼しました。結果的に参加者の負担は、JR本庄駅までの往復交通費と旅行保険代（100円）で、生徒の参加を費用面で後押しすることができました。

6 実施までの流れ

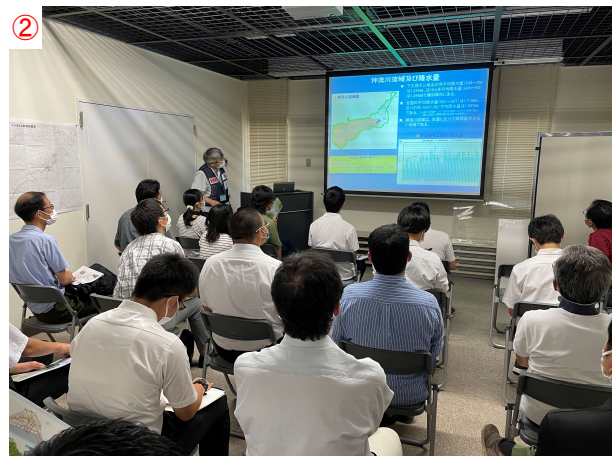
- 2022年 4月 地理部会事務局内で非公式に巡検実施について検討開始
- 5月 地理部会地区別研修会で巡検実施について検討（6日）
（一財）日本地図センター研究活動支援に応募（20日）
事前調査・本庄駅－下久保ダム－大恩寺（21日）
貸し切りバス手配・2社にあい見積もりを依頼
＊ 東武トップツアーズ（多野観光）に決定
視察依頼文書の送付（24日）
地理部会第1学期専門委員会、高社研理事会で巡検実施了承（27日）
＊ 感染対策について、万全を期すこと（高社研会長）
高社研総会での事前告知（27日）
- 6月 県指導課・巡検実施了承（8日）
各校へ派遣文書送付・高社研文書担当
- 7月 参加申し込み締め切り（5日）
直前の現地調査（17・27日）
参加者への連絡・メール（18・24日）
巡検実施（29日）
- 8月 感想等のGoogle Formsへの投稿を参加者に依頼（5日まで）
巡検後の体調不良、検査陽性等の連絡要請（5日まで）
報告集の編集・発行

■ 見学内容と参加者の声

* 囲み部分は解説要旨、以降は参加者の声をまとめたものです。参加者の声の「…」以降の赤字部分は坂戸西・加藤一郎のコメントです。写真は撮影者の記載のないものは県立浦和・澤岡知広先生または加藤が撮影したものです。

1 下久保ダム

- 洪水調節、新規利水（上水道・工業用水の確保）、不特定かんがい（神流川の水量維持など）、発電（水力発電）を目的とした多目的ダムです。
- 1962年に事業実施計画が認可され、1968年に竣工（完成）しました。ダム建設の背景には、1947年のカスリーン台風による埼玉県東部から東京・下町の浸水のほか、高度経済成長期の東京一極集中による首都圏の水不足などの課題解決がありました。
- より多くの水を貯めるために、ダム本体はL字型をしています。
- 季節により満水位は異なり、洪水期（7～9月）は満水位を低くして洪水を一時的に貯められるようにして、下流の洪水発生を防いでいます。
- 通常時は神流湖（ダム湖）表面の水が下流に放流されています。これは、ダム湖下層の水は非常に低温のため、河川環境やかんがいに大きな悪影響を与えることを防いでいます。
- ダム本体内部の気温は14℃で、一年を通じてほぼ一定です。そのため、夏は涼しく、冬は暖かく感じます。
- ダム本体はコンクリートでできていますが、一定の漏水があります。漏水は管理されており安全ですが、その水がコンクリートに含まれる石灰分を侵食して、ダム本体内部に人工的なカルスト地形（石筍・せきじゅん）をつくっていました。（坂戸西・加藤一郎）



①はダム本体を進むバス車内から撮影。右手はダム湖の神流湖。ダム本体がL字型していることがわかる。②は水資源機構職員の方による全体説明の様子。③はダム本体内部にできた人工的な石筍（せきじゅん）。④はダム本体を下から望む。

- 下久保ダムで作られた意図や、恩恵などがよく分かりました。地理的な立地（ここでなければならなかった理由）がもう少し詳しくわかると良かったと思いました。（教員）・・地形図を使って、ダム建設適地を考える授業もおもしろいかも？
- 巡検前日の夜間に埼玉県北部・群馬県南部で大雨が降ったが、貯水率ほぼ100%とはいえ下久保ダムの水量にまだ余裕があるように見えたのが意外であった。完成から年月を経ているため、メンテナンスの一環としてダム本体の更新をどのように行うのかも注視していきたい。（教員）
- エレベーターホールから歩いたダム堤体の中の涼しさから、乾燥地域で見られる石造りで窓の小さい家の合理性を理解した。（教員）
- 当日の水量で100%というのが興味深かった。ダム本体がカギ型になっていることで強度的にクリアするための工夫や技術について聞き忘れてしまいました。（教員）
- 重力式コンクリートダムであった。洪水期と非洪水期でダムの容量配分が異なっていることがわかった。表面取水設備によって冷たい水を放流せず農作物などに影響を与えないようにしていることがわかった。（生徒）
- ダムは、大雨の時に水をためるという役割は知っていたが、必要になる水をためておく役割もあるということを学んだ。最近は大雨だけでなく、水不足といわれることも多いのでダムが不可欠な存在であると分かった。（生徒）・・こういう答え、うれしいんですね!!
- 下久保ダム自体が初めてで、ダム内部に入るのも初めてでした。夏が渇水期というのは意外でした。（教員）
- 神流川上流のダム（上野ダム）と南相木村のダム（南相木ダム）は東京電力のものであること。（教員）・・見学可能です。二つのダムの落差を利用した揚水（よすい）式の水力発電が行われています。
<http://user.uenomura.ne.jp/kankou/view/hatsudensyo.htm>
- ダムへのこだわりを見せる人は何人か出会ったことがあるが、今回その理由が少し分かった気がします。ダムは用途と状況に応じて使い分けられ、管轄も異なり、一つのダムを取っても様々な角度から検討し、考察できる対象であり、非常に興味深かったです。また、職員の方々がどんな質問に対しても誠実に答えて下さったことに感謝です。（教員）
- 実際に現地で見ること、その大きさと温度を体感できた。実際に下久保ダムでは、ダム内部の気温や発電所との関わり、神流湖を見ることで、自分の頭にあった知識を身をもって知ることができた。また、現地に行くことで、新たな発見や疑問が生まれるのも良かった。例えば、ダムの底にある堆積した砂をどのように処理しているかなどだ。このようにして、実際の体験を通じて生徒が知識を深め、探求する活動が間近で見ることができた。（教員）
- ダムの役割や水害や電力との関係について、専門家から講義を受けた上で現地を臨めたことは非常に勉強になった。また、ダムの内部で石灰分が溶けだしている様子を見られたのも良かった。（教員）
- ダム本体上の通路を歩きダム湖を見ながら、治水は河川の上流から河口まで全体として機能している、その最上流部がダムなのだと、実感した。しかし、管理所職員の方々の話から、ダムの「緊急放流」など、独自の判断を迫られることもあるのだということがわかった。帰宅後、調べてみると、下久保ダムのかさ上げの必要性も検討されているようだ。近年は降水量が徐々に増えているだけに、河川管理の重要性はますます高まるのだろう。一方、堤体内部の通路を移動したときに見た石灰の「つらら」（鍾乳管・ストロー）が印象に残る。ダムという巨大な建造物も、確実に劣化している。さらにダム湖に溜まる堆積物の処理も大きな課題であるはずだ。これらに対し、どんな対策が検討・実施されているのか、さらに知りたいと思った。（教員）
- 東京の水瓶の一つである下久保ダム、水も電力も多くのを他の地域から供給されて利便性を高める首都圏、その一方で過疎化の進む地方。大都市と地方との構造は、明治以降変わっていないのだと感じました。（教員）



- 直線型ではなく、折れ曲がったダムを見るのは初めてだったので、見た時は驚いた。また、ダムごとに目的が違っていることを恥ずかしながら初めて知ったので良い経験になった。(生徒)..
ぜんぜん恥ずかしくないですよ！
- 説明を聞くことでわかった気になることも多いが、実際に肌で涼しさなどを感じると、ダム本体内部が一定の温度が保たれていることや、農作物の管理に欠かせない温度管理のために表面水を流すなどの疑問点も理解することができた。(教員)
- ダムの中に初めて入りました。ダムの構造を説明いただき、特に今夏も電力ひっ迫の中でしたので発電について興味を持ちました。(教員)
- 巨大なコンクリートの建造物(重力式コンクリートダム)との対峙は単純に迫力があつた。この地域は全国的に見ると降水量が少ない地域。夏場の洪水期(7月～9月)は水位基準を低く設定している。夏の水不足のイメージがあるが、雨量も多いので防災の側面からは水位基準を低く設定していることは納得できる。ダム水面の表面温度と底の水の温度は、夏場は30℃以上違う。底の方は年間を通して変わらない。生態系や農業用水としての利用の影響から、表面の水を流せるように「表面取水設備」がある。江戸時代より渇水時を水の取り合いを下久保ダムが解決した。のちに「第二発電所」がつくられたのは、第一発電所は地下にあり、ダムの放水トンネル区間に「川が無い(水が地表を流れていない)」箇所があつたことがあり、「景観」の問題対策として小規模な発電所(第二発電所)をつくり、発電に使用した水を神流川に流した。(生徒)..
ていねいに説明してくれてありがとう。
- 実際にダムの内部に入ることができ、ダムの中の空気が冷たいなど貴重な体験ができました。ダムの説明をきいて、地域の暮らしや生活を考える視点として、水系でとらえる視点も重要だと感じました。山地と平野はつながっていて、面で地域を考えることの大切さを改めて感じました。(教員)..
私も地理で防災の授業をしていて、同じようなことを感じるようになりました。
- 職員の方より直接お話しいただき、この時期は、大雨に備えてあらかじめ余裕を持たせてダム湖の水位を下げておき、貯水率100%としていることが新たな知見となりました。写真を見て、流木の処理も大変な業務であるのが分かりました。実際、ダム内の管理路を歩き、年間の温度が一定であることを体感できました。(教員)
- ダムでは水温の差や底に溜まる土砂の問題があることを初めて知り、単に貯水だけでなくそのような問題に備えた設備があることを実際に一部見ることで良かったです。またコンクリートの耐久性というダムだけでなく新幹線や高速道路にも言える問題を考えるきっかけにもなりました。(生徒)..
インフラの点検や整備は今後、ますます重要な課題になりそうです。
- 初めて内部からダムを見る機会であつたため、大変印象に残りました。また、ダムの構造や特殊な遮水法など多く学べましたので良い経験でした。(生徒)..
「初めて」というのは主催者としてはうれしい限りです。
- 普段は行けないダムの内部や放水口の間近を見学して、ダム建設の大変さ、災害対策の重要性などを現地からの視点で実感することが出来ました。(生徒)
- 下久保ダムが果たす役割について理解することができた。具体的には、神流川上流域の降水量が多いわけではない一方で、下流においては一定量の水道用水やかんがい用水が必要とされており、必要な時期に必要な水量を確保する、その調整の役割があるが、およそ5年に一度起こるという洪水の対策という役割も同時に果たしていることや、放流の際に発電をおこなっているところがわかった。また、平常時は地下を通して発電所に放流しており、地下を通すことで高さの差を大きくして効率的に発電していることがわかった。(生徒)
- ダムの内部など今まで見たことないようなものを多く見られて面白かった。また規則なども多く定まっており、ダムが私たちの安全・安心した暮らしの支えになっていることがわかりました。(生徒)..
私たちが意識しないところで私たちの生活が支えられているんですね。

2 譲原（ゆずりはら）地すべり資料館

- 地すべりとは、地下水の影響と重力等によってゆっくりと下方に移動する現象です。がけ崩れと比べ、土砂の移動範囲が大きいので、人間生活に大きな被害を及ぼします。
- 譲原地区の基盤岩は、神流川流域に広く分布する三波（さんば）川帯に属する結晶片岩（けっしょうへんがん）類です。地下40～50mのところに破碎帯（はさいたい）とよばれる岩石（結晶片岩）が細かく砕けた地層を挟んでおり、ここを境に大規模な地すべりの発生が危惧されています。・・プレートの運動と関連
- 三波川帯の結晶片岩類は、当地だけでなく中央構造線に沿って広く分布しています。さまざまな色がありますが、よく知られているのは青みがかったもので、長瀬の岩畳（いわだたみ）は三波川帯の結晶片岩が露出したものです。
- 当地の地すべり対策事業は、1991年10月の集中豪雨で地すべりが活発化したことから、1995年度から国の直轄事業として行われています。
- 地すべり対策工事（対策工）は、抑制工と抑止工に分けられます。抑制工は地すべりの原因となる地下水を取り除くことで、地すべりの動きを抑える工法です。一方、抑止工は抑制工だけでは十分な効果が得られない場合に、杭やアンカーなどで強制的に地すべりの動きを止める工法です。（坂戸西・加藤一郎）



①は砂防ダムボランティアの方から資料館展示資料について説明を受ける参加者。②は右手が譲原地区で発生が危惧される破碎帯地すべりを理解するためのジオラマ、左手はボーリング調査で得られた地質資料。破碎帯がどのようなものなのか、素人でもはっきりわかる。ここがすべり面となって厚さ40～50mの地盤が一気に神流川に向かって流れ込んだら、惨事は現地にとどまらず、広範囲に及ぶ可能性がある。③は集水井の真下を撮影。集水井に対して垂直方向にたくさんのパイプ（集水ボーリング）が埋め込んであり、常時、地下水が集水井に集められている。④は集合写真。写真①・②・④は国交省関東地方整備局利根川水系砂防事務所撮影。

- 日本がこれだけの山岳国家であるのに対して、災害や防災の資金に注ぎ込む費用が少なすぎると感じました。日本の防災技術力の高さは世界でも高い評価をされることのでしたので、ビジネスとしてアジア地域などに普及していくことは出来ないものかと思いました。(教員)
- 譲原は小さな集落であるが、ここで地すべり災害が起こると、相当広い範囲に影響が出ると知り、「バタフライ効果」という言葉が浮んだ。近年気候が極端化し、降雨も一度に大量のものが降るようになっているので、地すべりのリスクは現実的にはかなり高いのではないかと思う。こういったところで蓄積された防災技術は、海外に輸出できるのではないだろうか。また、アンカーや集水井など、実際に見てみなければ分からない技術が、この地域を文字通り支えているわけだが、工事などのハード面での災害対策だけでなく、同時にソフト面での減災の工夫(ハザードマップ、開発制限等)も組み合わせることで被害を最小限にし、その効果を多面的な視点から評価できるようにしておくべきであろう。例として、スーパー堤防のような治水設備は確かに有効だとは思いますが、造成に時間とコストがかかりすぎる。数年に一度あるような災害を工事によって防いでも、数十年～数百年に一度レベルの災害は、いくら工事しても焼け石に水なのではないか。工事ではどうにもならないような災害が起きても大丈夫と自信を持って言えるような社会の仕組み作りも必要。文系的発想も大事だと思う。(教員)
- 水抜き井戸を上から見られてよかった。また、杭は費用が高すぎるという本音トークに聞きがいがあった。ダムも地すべり対策も社会を支える重要なインフラだが、これらを一体的に管理する組織があった方が効率的なのではないかとも感じた。(教員)
- 地すべり対策は最初に抑制工を行い、十分な効果が得られない場合に抑止工を行っていることがわかった。模型(ジオラマ)を見て、地滑り対策工の流れがよくわかった。井戸はポンプではなく自然湧き出ているようだった。日本の砂防技術は世界トップレベルであることがわかった。(生徒)・・・この巡検から、土木技術を継承しようという意欲的な若者が出てくることに期待!
- 譲原は小規模な集落しかない山奥で、最初はこの場所に数十億もお金をかける必要性が分からなかった。しかし、譲原で地すべりが起こると利根川の流域全体が被害をうけると説明され、とても大切な地であることが学べた。そして、そのような甚大な被害を起こし得る自然災害の規模の大きさに改めて恐怖を感じた。(生徒)・・・1783年の浅間山噴火では、支流の吾妻(あがつま)川に火山噴出物が大量に流れ込み、本流の利根川にも大きな影響を与えました。利根大堰付近の河原では、今でも浅間山由来と思われる黒く気泡のある溶岩の欠片(かけら)を見ることができますよ。
- 減災の観点から、莫大な予算をかけて行わざるを得ないのでしょうね。もし、地滑りが発生し、神流川が堰き止められ、そのことによる土石流が発生すると下流の高崎市付近まで被害が発生する可能性から費用対効果の観点でこの事業が行われているとのこと。日本にはこのような場所が無数にあります。その中で規模が大きなものは三大砂防事業と言われる、立山カルデラ(富山平野に大土石流)、男体山(日光など大谷川下流地域に大土石流)、富士山大沢崩れ(富士宮方面に大土石流)の砂防工事です。地質年代的観点からはいずれも徒労に近い工事です。規模は譲原と違いますが、いずれの事業の本質は予算獲得の点からも費用対効果であるところが興味深いところでした。(教員)
- 地すべりという現象への無知を恥じました。非常に危険な状況であり、それに備えて日々、方策を整えているということを知れたのは大きな収穫でした。中でも興味深かったのは、地下水を排出するために細かい管を通して大きな管に集めそれを川に流すというシステムでした。(教員)・・・そんなことないですよ。各人が興味ある分野で社会に貢献していくことが大切なんだと思います。
- 日本が山岳地帯であるとともに降雨が多いため、地すべりが起こりやすくなると考えていたが、実際にはすべり面と地下水が強く影響していると初めて知った。地すべりの原因とその過程やその対策を見て、その災害の被害の甚大さを知ることができた。(教員)
- 地滑りを止める手段として水を抜くという発想で行っていたのは大変興味深かった。集水井の水も通常から量があって、大雨時にはかなりの量の水が出ている様子がわかり、非常に感心し地中に含まれる水分の多さに驚いた。(教員)

- 地すべりの対策がここまで徹底して実施されていることに驚く。集水井を実際に見学したとき、地下水の音が意外に大きく聞こえた。こうした工事により地下水が抜かれ地すべりの危険が低減されていることを実感した。一方、日本の地すべり危険地は 3748 か所で、そのうち国の直轄はわずか 11 か所であるという説明に驚く。同じ群馬県内のハッ場ダム周辺も地すべり危険地帯であるが、実際に現地を見ると、アンカーによる抑止工が施されたところがいたるところで「あかさび」しており、建設後数年で再工事も行われている。危険地帯の指定数も減らされた。土木技術は非常に興味深いものであるが、ダムも含めた近代の土木技術は、自然に対してどこまで有効なのかとも思う。持続可能な技術とはどんなものなのか考えさせられた。(教員)
- 譲原地すべり資料館の説明からは、たいへんな努力をしながら砂防事業が行われていること、そしてプレートの活動が活発で、火山が多い地質的特質から地盤の不安定さは、日本の宿命とも言えるものであることを教えていただきました。だとすれば、このように不安定な日本列島で原子力発電所を稼働させることはやはり問い直されるべきではとの想いも強くしました。(教員)
- 地すべりの原理は小学生の頃に図鑑で読んだ記憶があったが、わかりやすいモデルを通して見る事で理解が深まった。また、映像がかなり古いものであったにもかかわらず、現在も工事中であることに驚いた。地すべりが起きた際の影響が広域に及ぶ可能性があることから、政府は予算をもっと付けるべきだと思った。(生徒)・・・**既有の知識と結びつけることは大切だよね。**
- これほど多額の対策を行うのか疑問に思っていたが、かなりの量の土砂が下流域での大きな被害につながることを理解することができ、具体的な対策の現場を見ることができ良かった。(教員)
- 地すべりによる防災対策と聞き、周辺の人家や農業被害を思い浮かべていました。しかし、地すべりと川がせき止められることによって発生する下流の都市部への二次的被害の大きさと想定される被災額や、日本オンリーワンであることを聞き、この対策事業の役割の大きさと重要性を感じました。日本を強靱化し、さらには防災大国として諸外国への支援もできるのではないかと期待が膨らみました。(教員)・・・**砂防は海外でも「SABO」とよばれているんですね。**
- 地滑りの仕組み自体あまりよく知らなかったので、地滑りというものの根本について知ることができた。譲原地区の地滑り対策で抑制工+抑止工で3億5千万円+補正予算が組まれている。地区の住民の安全、インフラの保全、下流域への影響を防ぐために使われている。この金額が大きいのか小さいのかの実感は持てなかった。譲原地区の地滑りは、地下水の影響が大きいので排水が重要であり、実際に排水の様子を見られてよかった。土砂は自然によって常に生産されており、地形は絶えず変化していることを実感できた。(教員)・・・**地形の形成過程を知ることは、防災の基本ですよ。変動帯に位置する日本では、自然災害から逃れることはできません。だからこそ、利便性とリスクを天秤にかけて検討することが開発する上で重要だと思います。**
- とてもわかりやすい解説と展示でした。地すべりという現象が日本でとくに多いこと。日本の地形や気候の特徴が、地すべりが多いことに関係していること。その対策としての砂防の技術についても理解を深めることができました。(教員)
- 地すべりのメカニズム、費用対効果の観点から、国の事業となっていることを知りました。実際に、水抜き用の井戸を観察し、通常の水流の様子を体感することができました。(教員)
- 地下水が原因で地すべりが起こるなら、その地下水を回収する機構をつくろうと考えて、実際に設置して観測していることを知り、**本当に凄いなと感じました。**また地すべりといういつ突然起こってもおかしくない災害についても詳しく知ることができて良かったです。(生徒)・・・**そう思ってくれてうれしいよ。「仮説(課題の発見や解決しようとする意欲)→結果(実験や観察、データの収集)→考察(結果に基づいて仮説を検証)→仮説・・・」と、ここでやっていることは、まさに未知の領域に挑む研究だよね。たいてい仮説は成り立たないから、研究成果を上げるまでにはたいへんな労力と時間が必要だよ。でも、未知のことを追究していくのは楽しいよね。みんなの今後の活躍に期待しています!**

- 国の対策を知ることが出来て良かったです。地理の授業では、よく海外の地形問題が出されますが、こういった身近な場所にもこういう地理的性質によって生活が脅かされるとは思ってもいませんでした。もともと興味があったボーリング調査に関する話もあったので良い機会となりました。(生徒)・・・日本列島の地形は大きなレベルで見れば、プレートの活動によって今でも盛り上っていますね（隆起）。小さなレベルで見れば、隆起していることに加えて降水量も多いことから、川の上流では地面を削る作用（侵食）が強く、下流ではたまっていく作用（堆積）が強く働いています。大小二つのレベルで地形を考えると理解が深まりますね。
- 名前を知ってるくらいだった「地すべり」に対して、起きる仕組みから起きやすい地理的条件、そこから考えられる地すべり対策まで理解を深めることが出来ました。自分の知らない自然の危険を知る良い機会だったと思います。(生徒)・・・知ったことをどう活かしていくのが大切だよね。
- 火山噴出物が堆積したような場所が山間部に多く存在しており、そのような場所で地滑りが起こると、その場所に住む人たちの命を脅かすだけでなく広範囲に甚大な被害が想定されること、また、自分達の気づかないところでさまざまな対策がなされていることがわかった。(生徒)・・・その通り！だからこそ、広い視野で社会を見ていくことが大事なんだと思います。

3 鬼石（おにし）自然石センター（株）

- ここに展示されている石（岩）は、すべて自然の川の流れ（侵食作用）によって形づくられたものです。結晶片岩に含まれる硬い層（チャートや石英など）は侵食されにくい一方、軟らかい層（泥岩など）は侵食されやすいので、独特の模様が現れます（差別侵食）。
- 地元産が主ですが、徳島県や愛媛県などで産出する三波石のほか、日本全国の天然石が展示してあります。
- この展示場の特徴は、何と言ってもそれぞれの石に正札（値札）が付けられていることです。何に価値を見出すのかによって値段は変わりますが、こちらでは大きさや形、模様の出方などによって値付けしているそうです。
- 現在、自然石の採取は自然保護などの観点から採取が規制されていることが多く、地元・藤岡市でも河原の石（岩）を採取できません。こちらに展示されている自然石は、規制前に先代の社長が全国から集めた貴重なものです。（坂戸西・加藤一郎）



- ①は鬼石自然石センターが誇る名石「踊り子石」（写真左の大きな石）。現在の社長・櫻井紀様のおばあさまが名付けた。きっと美意識が高くて風流な方だったのだろう。みなさんは、右手を頭上に高く上げながら踊っている女性の姿を感じることができますか？ それにしても、採れた石をどのような向きで立てるのかによって見え方は違ってきますよね。この石を横に置いたり、逆向きの縦に置いたら「踊り子」は見えなかったでしょうし。石の世界は深いなあというのが率直な感想です。
- ②は「観山」と名付けられた石。山から無数の川が流れ出ているように感じられる。380万円の正札。③は値ごろ感のある石も展示されている。④は藤岡市出身のタレント・中山秀征さんが購入した石。8月12日（金）夜、フジテレビ「爆買い☆スター恩返し」でこのときの様子が紹介された。お世話になった方々へプレゼントする石を、中山さんは長時間にわたって探していたようだ。

- 300 円の小石から 680 万円の岩まで置いてあった。盆栽に通ずるものを感じた。いつか自分も「立派な石で両親の墓を建ててあげたい」と思うようになるのだろうか。(教員)
- あまり見るができなかったが、石から河川の流れる感じことができ、変成岩の大きさを感じることができた。(教員)
- 地質及び地殻変動、そして川の流水の侵食作用によって様々な紋様の石が形成され、それが日本各地で採取できているのに感動した。(教員)
- 石の値段が高すぎて何も買えなかった。(生徒)・・・たしかにそうかもしれませんね。でも、何に価値を置くのかは人によって違いますね。私たちが当たり前のように使っているお金だって、お金には価値があるとみんなが「信じている」から通用しているんですよ。だからこそ、自ら価値を創造して、多くの人の理解と共感を得て新たなビジネスチャンスをつくり出すことも大切ではないでしょうか？若いみなさんに期待したいところです。
- 道の駅の下の資料コーナーがまとまっていてわかりやすかった。自然石センターの展示してある石の値段に驚くとともに、自然が作り出す造形に素晴らしさを感じた。(教員)・・・そうなんです。もっとアピールすればよかったと反省しています。三波石や碎石業は藤岡市の重要な地場産業でもありますし、当地で産業をテーマにした巡検も企画したいですね。
- 値段の付け方をどう決めているのか。需給関係どこまで反映？儲けは？など様々な疑問が浮かんだが、広い庭に石のテーブルと石の椅子であったり、枯山水などへの憧れはある。(教員)
- 実際に石に値付けされていて販売されているのが興味を惹きました。時間がもう少しあれば、仕入れ方法、値付けの基準など販売されている方から詳しくお話を聞いてみたかったです。(教員)
→鬼石自然石センター(株)代表取締役・櫻井紀様よりご回答いただきました。
 - (値付けの基準) 基本は大きさ、形、模様、石肌などによって値付けします。キズやどうしても落ちない汚れなどあればマイナス査定になりますし、あまり無い希少な石であればプラスに…。また、展示場の設置場所でも価格は変わったりします。その石のポテンシャルが十二分に発揮できる場所であれば強気な価格が付けられます。逆にここでは満足のいく価格は付けられないが仕方ない、なんて時もあります。その様な石はむしろ売れてほしくないのでもオススメしないです(笑)・・・「展示場の立地で価格が変わる」というのは意外でした。
 - (表示価格と価格交渉) また、表示価格についてはあくまでも目安です。値段交渉は有りですし、おまとめ値引きも有ります。逆にお客様のお庭の状況によっては引込費用が掛かってしまうケースもありますが。先日は自分で取りにくるので3割引きにと交渉された方がおり、売約となりました。実は場内に取りにきていただけるなら半値でもと思っている石もいくつかあります。・・・このあとの話にも出てきますが、運搬と設置がたいへんなんだそうですよ。しかし、道路や建設工事の職人さんってすごいなぁと思うんです。もちろん段取り(施工順序や管理)やマニュアルはあるにせよ、個々の職人さんが身に付けた技術をもとに、その場にに応じてつくりあげていくことに感激することが多いです。
 - (石の設置と運搬) ご時世的に安全第一なので大きな石は取扱が難しいんです。クレーンの吊り上げ重量規制で、昔なら吊れた石も今では一段階大きなクレーンにしなければならず、その為にクレーンが敷地に入れないなどあります。輸送の交通事情も昔と違い大変厳しいです。・・・工事をしているお宅のご近所からの苦情や警察などへの通報があるそうです。
 - (仕入れ) 玉石やテーブルなどは、山から採取加工している専門業者から仕入れてきます。ただ、ほとんどの川石は当時父(先代社長)が全国から仕入れた物です。父が現地に赴き交渉し、選んだ石を後日運んでもらいました。ただ現在では満足のいく良質な石を仕入れる事は大変難しいです。そもそも全国的に川からは採れないのが現状ですし…。なかには石が不要になったお宅などから片付けきた石を再利用している業者もいますが、片付けてきた石は長年手入れもされず、庭木の樹液や水垢が落ちない物が多く、満足に売り物にできるレベルとは言えません。・・・実は展示場に展示しているもの以外にも、もっとたくさんの石が倉庫にあるそうですよ。しかし、自然石は和の庭園には欠かせない重要なアイテムですし、櫻井様の事業がどうか発展しますように、心からお祈り申し上げます。

- 一見何でもない石でも形成されるまでに途方も無い過程を経ているからこそ、自然石として値段がつくのかなと考えました。(生徒)・・・日本は資源の乏しい国だと教わってきたと思います。ですが、地殻変動が活発で、今も隆起が続いている日本は、実は多種多様な鉱産資源の宝庫です。しかし、わずかな量ゆえ残念ながら採算がとれないのです。日本にはどんな資源が眠っているのか、かつてはどんな鉱産資源が採掘されていたのか、調べてもらえるとうれしいなあ。
- 素人には価値基準がよくわからなかったが、確かに綺麗で立派だと思った。世は広いと感じた。(生徒)・・・そうなんです。世の中は知らないことばかりです。だからこそ、調査したり、研究したりすることは楽しいんですよね!

4 大恩寺

- 大恩寺の住職であるティック・タム・チーさんは、2000年に大正大学に留学し、卒業後も国際仏教学大学大学院で仏教について研究を続けました。2011年の東日本大震災で助け合いの重要性を感じ、日本におけるベトナム仏教の組織化（在日ベトナム仏教信者会）を進めることになりました。その後、本庄市児玉町地区にあった寺院を買い取り、大恩寺を開きました。2020年からはコロナ禍で苦しむ在日ベトナム人の支援に奔走してきました。また、在日ベトナム人が置かれている現状を、メディアやSNSなどを通じて積極的に発信しています。
- ベトナムの仏教は、日本と同じようにインドから中国をへて伝わった大乘（だいじょう）仏教系ですが、日本とは異なりはっきりとした宗派（真言宗や曹洞宗など）はありません。多くが浄土宗系で、大恩寺でも講話の前に「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」という念仏（ねんぶつ）を唱えました。
- 在日ベトナム仏教信者会は、在日ベトナム人コミュニティ、ベトナム大使館、ベトナム航空などと連携しながら、生活に困窮する同胞の支援にあたっています。また、警察や市役所、法務省出入国在留管理庁（入管、にゅうかん）など日本の行政機関とも連携することによって、日本社会との共生も図ろうとしています。
- 多くの在日ベトナム人は、技能実習、留学などの在留資格（外国人が日本国内で生活するための資格）を得て、合法的に日本で生活しています。少子高齢化やきつい作業を嫌う日本人の増加、人件費を削りたい経営者の存在など、さまざまな要因により人手不足に陥っている農業、工業、建設、飲食などの分野では在日ベトナム人が貴重な戦力として活躍しています。しかし、在日ベトナム人のなかには劣悪な労働環境や、慣れない日本のことや習慣に苦しんでいる人も少なくありません。
- とくに技能実習の場合、問題を抱える技能実習生を支えるはずの「監理団体」も、十分な役割を果たしているとは言えない現実があります。また、ベトナム国内で日本へ技能実習生を募集・訓練する役割を担う「送り出し機関」に支払う手数料は一般に高額で、親類などに多額の借金をして日本にやってくるベトナム人も少なくありません。借金を抱えているため、仕事が合わなかったり、待遇が悪かったりしても簡単に帰国できないという現実があります。
- ただし、技能実習生に対して親身になって寄り添う日本企業や監理団体もあり、こうした企業などに出会えるかどうかは、運次第だということです。
- 2020年に始まったコロナ禍により、在日ベトナム人のなかには仕事を失って生活に困窮する人や、日本とベトナムを定期航空便も止まっていて帰国がかなわない人もいました。こうした同胞を救うため、食料や住まいの提供、仕事のあっせん、日本の行政機関との橋渡しなどの支援（犯罪を起こしたり、不法滞在などの罪で逮捕されないように）を積極的に行ってきました。また、苦しい生活からくる精神的なケアや、図らずも日本で亡くなった同胞に対する供養（葬儀、死亡届の提出、遺骨の母国への移送など）も大切な仕事です。
- こうした支援は、在日ベトナム人のほかにも、外国人への支援に取り組む日本のさまざまな団体の寄付などによって支えられています。
- ティック・タム・チーさんは、税金や社会保険料を納め、労働力の面でも日本社会に貢献する在日ベトナム人を仲間として大切にしてほしいと訴えていました。（坂戸西・加藤一郎）



①は本堂入口手前にある受付。写真左の「祈願名」の赤い縁取りの看板は、以前の宗教団体のものか？②は本堂内でティック・タム・チー住職の講話を真剣に聞く参加者。③は大恩寺の農園。避難者を中心に農園の手入れが行われている。④はティック・タム・チー住職を囲んで参加者全員で撮影した集合写真。

- 私は前職で住宅設備関係の業界にいましたが、やはりベトナム人労働者が会社にいました。もう少し早く、自分が大恩寺について知っていたら、その方達との関わり方が違っただろうと感じています。我々教員が生徒たちに外国人労働者の現状を伝え、少しでも多くの生徒が人に優しく接していけるように指導していきたいと思いました。(教員)・・**まずは知ることが大切なんですね。**
- 「だろう運転」「かもしれない運転」という言葉がある。運転免許を取得する際や自転車運転の講習の際に聞く言葉である。「こんなところから人が飛び出してなんかこないだろう」「このタイミングなら突っ切っても大丈夫だろう」という、自分本位、自分にだけ都合の良い思考で事故を招きやすいのが「だろう運転」である。「もしかしたら人が飛び出してくるかもしれないから速度を落とそう」「無理に突っ切ると接触するかもしれないから慎重に行こう」と、目には直接見えない可能性を想像して事故を未然に回避するのが「かもしれない運転」である。技能実習生制度は、「だろう運転」の制度である。日本にとって都合の良い想定だけから成り立たせている制度だから事故（実習生の失踪や退職等）が絶えないのだと思う。低賃金労働、ハラスメント、実習生の生活困難などが発生する「かもしれない」とは全く考えずにできた制度としか思えない。大恩寺住職のティック・タム・チーさんは「制度は悪くない、一部の社長さんたちが問題」と仰っていたが、私としてはやはり、技能実習だけにとどまらない制度全体を改めるべきだと思う。奇しくも巡検当日に、古川禎久法務大臣が閣議後の記者会見で技能実習制度を見直す考えを表明した。これをきっかけとして、「だろう運転」で設計されているすべての制度を見直し、「かもしれない運転」の制度に生まれ変わらせる契機とすべきであろう。また、普段モノを購入し生活している我々にも、目に見えない物流の上流部分を想像する力が求められていると強く感じる。食品

や工業製品など、発展途上国産のものよりも国産のものを評価する日本人は多い。しかしその国産の食品や製品の生産を国内で担っているのは技能実習生など、都合よく低賃金で使役されている技能実習生たちなのである。モノの生産の現場を目にしていなかったからこそ、自分たちにとって都合よく考えられるのではないだろうか。今回我々は、普段はなかなか見る機会のない、さまざまなモノや仕組みや現場を見せていただくことができた。世の中が様々な形で複雑に絡み合っていて動いていることをよく理解できた。生徒に身につけさせたいのは形式的な知識だけではなく、その背景を捉えようとする姿勢、当事者の思いを聞いて理解しようとする姿勢である。今回の巡検でも、地域と関わる様々な人々の思いを強く意識し、生徒に伴走しながら勉強することができたのは、教員として幸せなことであった。(教員)・・・想像する力は大切ですね。また、安さを追求しすぎることは、結局、自分たちの首を絞めることになることを「想像」することが閉塞した日本社会にとって大事かもしれません。

- 本音トークが聞けてよかった。元実習生の目の寂しさに現実を垣間見た気がする。直接会えてよかった。(教員)
- ベトナム仏教には宗派はないことがわかった。帰国支援や住居の提供だけでなく、困難者相談や亡くなった方への供養など、在日ベトナム人に対するさまざまな手厚い支援をしていることがわかった。(生徒)・・・ベトナムは大乘仏教だという知識を地理の授業で教えることはあっても、それ以上は私も知りませんでした、というより知ろうとしてきませんでした。仏教をはじめとして宗教に関する理解は、今年度入学生から必修科目（高校生全員が卒業までに学習しなければいけない科目）になった「地理総合」でも求められているんだ。
- 技能実習生は日本の足りない労働力を補っているという一面もあり、日本からしてもありがたい存在だと思うので、待遇を早く改善しなくてはいけないという危機感を抱いた。ニュースで感じた危機感が、今回話を聞いてより強まったと思う。(生徒)・・・ベトナム人は仲間なんですよ。仲間とどうやって付き合っていくか、一人ひとりの日本人が考えなければいけない問題です。
- ティック・タム・チー住職のベトナム人同胞を救おうとするエネルギーに圧倒されました。他者に対する仏法者の慈悲の実践なのだと思います。技能実習生制度や留学生倍增政策などは、外国人を安く使う目的なのは当初から指摘されてきたことですが、日本人の多くはそのことに目を向けようとしません。ヨーロッパ各国で起きている外国人労働者と自国民の軋轢の問題が日本にも起き始めていると思います。日本という国は、この本質的な問題を先送りにして目先の利益ばかり考えてその場しのぎの政策が、そのことによるその後起きるであろうとする問題を検討、議論することなく、当然国民的合意もなく進んでしまう国です。日本は長期的展望を自ら構築する力が弱い国（民族）だと思います。いままでも、外圧によってでしか日本の社会は自ら変えていくエネルギーを発揮できませんでした。問題がおきて、あるいは大きくなって、右往左往するというのは黒船の来襲や明治維新、第二次大戦の開戦、敗戦、戦後社会の構築を見れば明らかです。人口減少社会を迎えた我が国は、巷で気づいてみたら300万人という外国人と共生する覚悟があるのか（わたしは大方の人はないというか、何も考えていないと思います）、今後どうなっていくのかということを、大恩寺を訪ねて改めて考えました。『Wedge』2022年7月号で特集された「日本を目指す外国人労働者 これ以上便利使いするな それでも移民の議論をさけるのか」、このタイトルの通りだと思います。(教員)・・・この記事は有料なのですが、同じ『Wedge』にティック・タム・チーさんのインタビュー記事（無料）がありますので、ぜひお読みください。みなさんはどう考えますか？ <https://wedge.ismedia.jp/articles/-/26971>



- 私の担任するクラスにも一名ベトナム国籍の生徒が通っています。大恩寺のお話はうかがったことはありましたが、今回その実態とそこでの活動について深く知ることができたのは非常に有意義でした。特に「駆け込み寺」と呼ばれることが誇らしいという言葉が少し意外であり、日本とベトナムの違いの一つを見たように感じます。本校には多数のベトナム国籍の生徒が通っています。私自身当事者として技能実習生制度について考えるべきだと痛感しました。(教員)・・・外国にルーツを持つ生徒は今や珍しくないですよ。なかでも外国で育った子どもたちにとっては、こ

とば や 文化の違いは大きな壁になっているに違いありません。みんなの安心・安全のために、私たちにできることは何か、真剣に考えていく必要があると思います。

- ベトナムの方々が運営している寺院ということで、日本の仏教との違いを考えながら話を聞いていた。その中から、日本の寺院が観光や季節行事のための共同体の役割を果たしているのに対して、ベトナム寺院は貧困層や病気等の人々の保護や支援など教会としての役割が強い、ということを感じた。これが全てではないと思うが、言語の壁や文化圏の違い、さらにはコロナウイルスという不確定な事象がつながったことで、このような役割を果たしていると考えられる。このようなさまざまな問題を結びつけることによって見方が変わることを知ることができた。(教員)・・日本のお寺も昔はそうだったんじゃないですかね。社会保障が整備されていくなかで、次第に行政の役割として認識されるようになっていったのではないのでしょうか？
- 日本の技能実習制度の実態について知識としてはあったが、住職からうかがったコロナ禍における現場の状況は想像を超えて悲惨なものであった。この内容は地理総合の授業に多分に生かせると思い、非常に良い勉強になったと考えている。(教員)
- 「移民」を認めず、外国人(特にアジアからの外国人)を安い労働力としてしか見ない日本の現状をみた。最後に話してもらった3人の「技能実習生」の訥々(とつとつ、途切れがち)とした言葉が胸に刺さった。30年前、日系ブラジル人とささやかな交流を続けたことがあったが、彼らの日本人上司が私たちに向かい、笑顔で「わが社のために、(日系ブラジル人の社員との交流を)頑張ってくださいね」と言って帰って行ったことを思い出す。日本人社会の根深い外国人蔑視観を「共生」へと変えていく必要性を、この「事件」以来強く感じているつもりだが、今日あらためてそのことを心に刻んだ。日本の制度を変え、日本人の意識を変える。そのために教育が果たす役割は大きい。ティックさんに促されて唱えた「なんもーあーじーだーかあ」は「南無阿弥陀仏」と知る。(教員)・・最近は少なくなりましたが、少し前は日系ブラジル人の人たちがたくさん働いていましたね。ちなみに、「なんもーあーじーだーかあ」をベトナム式ローマ字で書くと、「Nam Mô A Di Đà Phật」です。ベトナムでは漢字や独自の文字・チュノムも使われましたが、フランス植民地時代の影響もあって、第二次大戦後はローマ字が使われるようになりました。
- ベトナム人の駆け込み寺と言われる大恩寺では、以前から問題にされていた技能実習制度の現場の生の様子を知ることができました。ティック・タム・チー住職は、「日本人の雇い主がみんな悪いわけでない、いい雇い主さんもいる」「言葉の問題もある」と言ってくれましたが、こうした問題点をチェックしフォローできる制度設計になっていないことが問題なのだと考えます。東南アジアの安い労働力を簡単に供給するためだけの制度になっていないか、抜本から見直す必要があると思いました。(教員)・・バブル崩壊後、長期にわたって日本の賃金水準は抑えられてきたために、外国に比べて日本の賃金が相対的に低くなっている状況が続いています。逆に日本人が海外に出稼ぎに行くなんてことも起こりかねませんし、外国人から見向きもされない国になってしまう可能性もあります。
- 大勢のベトナムから来た技能実習生が酷い環境で働かされている事は前々から知っていた。しかし、実際に会って話を聞くことでその情報が画面の向こうの話ではなく、現実のものであることを再確認させられて今まで見て見ぬふりをしていたことが辛かった。また、ベトナムは社会主義国家であるにもかかわらず、日本へチャーター便を用いて支援を送れるほどの布施を集めることのできるベトナムの仏教界に驚いた。(生徒)・・一般に、社会主義国では宗教は厳しい立場に置かれることが多いですからね。ティックさんに質問すればよかった・・。
- タイムリーな話題で、技能実習生の置かれている立場、境遇など、実際に接している方の話は説得力があった。もう少し実習生の話が聞けると良かった。人権に関して、日本人としてもっと多くの人に知ってほしいと思う。(教員)・・時間配分をきちんと打ち合わせしておけばよかったと反省しています。
- 気づきにくい外国人コミュニティのお話を伺うことができました。異国で様々な苦難に直面する彼らが労働者として尊重されることを望みます。(教員)
- 在日ベトナム人のほとんどは大恩寺を知っている。Facebook でつながっている。技能実習制度はベトナムは民間会社が仲介し、日本の受入側も会社次第でいい会社も悪い会社もある。もう少

し働きやすさや待遇等、きちんとした基準を作った制度にすべき。実習生は楽しみの無い生活で日本人との交流もほとんどないから、日本語が上達しない。文化の違いでトラブル起きやすいので、お互いの理解の為にも交流は必要。実習生は貧しい地方の若者が多く、実習生の日本での最低賃金額でも家族全員養える。実習生の殆どは給料入ったらすぐに自国に送金してしまうので手持ちのお金がない。そのため、コロナ禍で仕事なくなったりしても帰国するお金がない。大恩寺はコロナ禍のなかで1万人の実習生と8千人の留学生を支援。この2年間でベトナム人100人が事件や事故、自殺等で亡くなっている。ベトナムの寺院は公民館のような「公的な場」としての役割大きい。ベトナムの僧の役割は大きく三つあり、葬儀、説法、慈善事業である。ベトナムの仏教には宗派がない。得度（とくど、仏門に入る）すると、食事は精進料理のみで結婚もできないなど、厳しい戒律を守らないといけない。大恩寺は不法滞在の人物は受けない。入館や警察と連携した動きができるので、犯罪や事件から同胞を守ることができる。(教員)・・SNSの普及でつながれるようになった一方、タイムリーに知ることでもできるようになったのは大きいですね。

- 大恩寺のこと、ティック・タム・チーさんの活動のことを、現地でチーさんから直接話を聞くことができ、とても印象に残っています。ベトナム人の方にとって、チーさんの活動や存在は大きいと思いました。また、日本の社会にとっても同様です。(教員)
- 大恩寺がベトナム仏教寺院に生まれ変わった経緯や、ベトナム仏教の実態、技能実習生制度の問題点などに詳しくお話しされて、参考になりました。普段なかなか知ることができない日本とベトナムの仏教の違い、希望をもって来日された技能実習生の方々の厳しい実情を知ることができました。コロナ禍が長期化する中で、せっきくの支援も限界に達していることがよく分かりました。また、実際に大恩寺で生活されているベトナム人の方を目の前にすることにより、資料からでは知ることができない大恩寺に身を寄せざるをえなかった状況が分かりました。(教員)・・まさにこれが巡検の一番のだいご味ですね。
- この大恩寺で特に印象に残っているのは、最後にお話しされていた日本語の表現についてです。外国人労働者はきれいな日本語を習っていたために、「どけ」や「逃げろ」という日本語が伝わらないことがあると伺い、今までに自分は思いつきもしなかったなと気付かされました。(生徒)・・このことは私も気づきませんでした。
- 日本の制度的問題を痛感させられました。技能実習制度を調べていくうちに、如何に失陥がひどく、実習生を保護する体制を伴っていないか、よくわかりました。私も見て見ぬふりをせず、しっかりと制度の改革がなされるように、見守っていかなければならないと考えました。(生徒)・・選挙で投票することが第一歩かな。
- 海外、特に中国やベトナムなどから仕事を求めてやってくる人が近年多いというのは知っていましたが、その一方で外国人労働者の恵まれない境遇があるという実態を知り、日本の労働面での課題を実感しました。しかし、大恩寺のように実績の多い救済施設もあるので、課題解決のためにできることを増やしていきたいと思いました。(生徒)・・前の生徒さんと同じだけど、自分の事として課題をとらえることが、結局は自分にとってもプラスになるんですね。
- 今回の巡検がなければ、おそらく自分はこのようなことを考える機会はなかったであろう、貴重な経験になった。現在、技能実習生をはじめさまざまな外国人が日本に来ており、その存在が日本にとってかけがえのない、大切な存在であることを確認することができた。その一方で、日本人のなかに人権を無視した過酷な環境で労働をさせるなど、大変な境遇におかれている外国人がコロナ禍も相まってたくさんいるのだということを、強く意識させられた。チーさんのような他の人のために尽くせる人がかっこいいと思った。自分が普段あたりまえに過ごす生活の裏には人権の問題があること、人権の問題は発展途上国だけの問題ではなくて、実はこの日本にも普段気づかないだけで存在していることにもっと耳を傾けていく必要があると思った。(生徒)・・さっきも言ったけど、見えない部分をどう想像するか、そして自ら知ろうとするかが大切だね。
- 多くのベトナム人のために、一人を中心として数人が援助をしているということに感銘を受けた。僕は巡検後 YouTube でティック・タム・チーさんについてのニュース動画を見たが、無情な世の常に対して奮闘するティック・タム・チーさんの思いがより深く知れて、技能実習生についての関心が高まった。(生徒)・・素直にうれしいよ!!

5 その他

- 多野観光の保坂さんのドライビングテクニックに感謝いたします。(教員)・・ほんとにそうですよね。保坂さん、ありがとうございました!!
- 今回初めて巡検に参加させていただきました。帰りのバスでも出たお話でしたが、一人ではまず行くことのない場所にも行くことができ、素晴らしい体験でした。(教員)・・できればそういう場所をねらって選んでいるんですが、難しく考えずに気楽に企画してみてもいいかなと思います。1日通しの巡検は企画もたいへんですが、学校の周りのミニ巡検はおすすめです。7月の地理部会・第1学期研究会では、学校周辺のミニ巡検をどのように企画して実行するかについて検討しました。よかったらご覧ください。
https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/#2022_1gakki_kenkyuukai
- 様々なテーマに関して資料を作り、バス内で解説していただき、おおいに勉強することができました。また、こうして、巡検後のまとめを書くことも、学んだことを自分の中に定着させるために良い機会だと思います。(教員)・・東芝深谷工場の閉鎖については、まったく知りませんでした。情報ありがとうございました。巡検のなかで、情報交換の時間がとれると良かったですね。来年に活かします。
- 今回、高校生が参加していたことは素晴らしいと思いました。こうした生での学びの機会を増やすことが、学習を単なる知識の蓄えではなく「考える」、そして「行動する」営みに導いていくのだと確信しました。生徒同士の交流の機会も保障してあげられるとさらに豊かな体験になったのでは感じました。ともあれ、高社研の巡検や研究会に生徒に参加してもらう取り組みは、生徒だけでなく教員にも刺激になると思います。(教員)・・せっかく同じバスに乗った者同士、何らかの交流の場を設けることは大切ですね。来年に活かしたいと思います。
- 早大本庄駅の開発と旧中山道などの工業地域の衰退などの話も興味深く、地域経済についても調べると面白いと思いました。(教員)・・いろんなテーマでできるのが巡検のいいところでしょうか。ちなみに、社会部会の関口先生に情報提供いただいた東芝深谷工場の閉鎖と大和ハウスへの用地売却について、自分でも少し調べてみました。
 - 東芝深谷工場の OB 会会報・・深谷工場の歩みがわかります
<http://www.lets-happy.net/toshibaob/OBkai/kaihou/kaihou36.pdf>
 - 大和ハウスの DPL (ディーププロジェクト・ロジスティクス)
<https://www.daiwahouse.co.jp/release/20130409100421.html>
- 一つひとつの施設で色々質問できる時間もあり充実した 1 日になりました。(教員)・・ありがとうございました。
- やはり、現地に赴いて初めて知ることが多く、貴重な機会となりました。(教員)・・そう言っていたら、正直、うれしいです。



下久保ダムをバックに集合写真。写真左手の建物は群馬県が管理する第二発電所。規模の小さな水力発電所だが、ここで使われた水はダム直下から放流され、天然記念物・三波石峡の景観維持に大きな役割を果たしている。この写真には写っていないが第一発電所で使用された水は、道の駅上州おにしの手前（神流川の上流側）で放流されているため、第二発電所が建設されるまで、三波石峡には水がほとんど流れていなかった。私たちの安心・安全な生活と自然環境の共存は重要な課題だ。

高社研地理部会主催地理夏季巡検 報告集

発行日：令和4年 8月31日

発行者：埼玉県高等学校社会科教育研究会地理部会

ホームページ：<https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/>